

Title	第1章 1999年度京都大学構内遺跡調査の概要
Author(s)	鎌田, 元一; 清水, 芳裕; 伊藤, 淳史
Citation	京都大学構内遺跡調査研究年報 The Annual Report of the Center for Archaeological Operations (2003), 1999: 1-2
Issue Date	2003-11-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/226699
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

第1章 1999年度京都大学構内遺跡調査の概要

鎌田元一 清水芳裕 伊藤淳史

1 調査の経過

京都大学埋蔵文化財研究センターでは、吉田キャンパス及び附属施設での建物新営やその他掘削工事に際して、予定地の埋蔵文化財調査を、発掘、試掘、立合に分けて実施している。1999年度には、以下の発掘調査4件、立合調査4件を実施した。

発掘調査	総合情報メディアセンター新営予定地（総合人間学部構内 AN22 区）	（整理中，図版 1-261）
	病院基幹整備（道路その他）工事（病院構内 AF20 区）	（第 2 章，図版 1-269）
	南部総合研究実験棟新営予定地（医学部構内 AO17 区）	（第 3 章，図版 1-270）
	法経他総合研究棟新営予定地（本部構内 AW26 区）	（第 4 章，図版 1-271）
立合調査	総合博物館新営予定地（本部構内 AX22 区）	（第 5 章，図版 1-272）
	工学部校舎（第Ⅶ期）新営その他工事（本部構内 AT27 区）	（第 1 章，図版 1-273）
	病院基幹整備（道路その他）工事（病院構内 AF20 区）	（第 1 章，図版 1-274）
	総合情報メディアセンター新営その他外構工事（総合人間学部構内 AN22 区）	（第 1 章，図版 1-275）

2 調査の成果

前節で掲げた調査のうち、1999年度に整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお、病院構内 AF20 区、医学部構内 AO17 区、本部構内 AW26 区の発掘調査、本部構内 AX22 区の立合調査については、それぞれ第 2 章～第 5 章でも報告している。

病院構内 AF20 区の発掘調査 狭小な調査区であったが、集石土坑や井戸状の遺構から多数の土師器類が出土し、中世を中心に多くの成果が得られた。また、基盤となる黄褐色シルト層も安定して確認され、地形形成史を復原するうえで貴重な情報が得られた。

医学部構内 AO17 区の発掘調査 破碎されて層を成す焼土塊や多量の鉄滓の出土などから、中世の鑄造関連遺構の存在が示唆された。多数検出された井戸や集石、土器溜から大量の土師器や瓦が出土する状況も従来と傾向を同じくし、職能民の活動をともなう中世遺跡のひろがりが見えられ、多くの情報が追加された。土器類では、13・14世紀代の一括出土品を口縁部計測法で計量し、法量や組成の変遷が示された。軒瓦や窰記号・刻印を

多数含む瓦類は、大覚寺御所跡第Ⅱ期瓦群との良好な比較材料で、中世瓦の生産と流通を検討するうえで重要な資料である。こうした課題について、南接するAO18区出土資料の再整理をあわせておこない、結果を本年報第Ⅱ部の紀要に掲載している。

本部構内 AW26 区の発掘調査 成果は各時期にわたる。縄文時代では、これまで北～西側調査地で後期を中心とする資料がまとまって出土していたが、今回は少量で、遺跡の中心から離れていることが想定された。古代では、古墳時代末期の7世紀ごろの溝から須恵器が出土している。構内遺跡で少ないこの時期の資料が、調査区一帯では出現頻度が高く、注意される。中世では、井戸や瓦溜から13・14世紀代を中心とする土器や瓦のまとまった資料が得られた。とりわけ、回転糸切りの底部をもつ非京都産の土師器が一定量含まれており、注目される。近世については、東西方向の溝状遺構から幕末期の資料がまとまって出土し、本部構内に位置した尾張藩邸の施設との関連が想定される。

立合調査の成果 本年度に実施したうち、発掘調査に付随する周辺工事以外の2件は、校舎の解体や新築にともなうもので、重要な知見が得られた。

本部構内 AX22 区では、時期不明の大溝および黄色砂層以下の堆積や高野川系流路の攻撃面が確認され、詳細を第5章に報告し検討を加えている。大溝は、幅・深さとも2m前後の南北方向のものと、それより小さな東西方向の各1条がある。浜崎一志氏による白河の条坊地割復原に照らすと、南北方向の中心軸「今朱雀」と条坊北端の「一条大路末」にはほぼ相当する位置で検出されており注目される。断面による確認にとどまったため、帰属時期の比定や方位の確認が今後の課題として残されるが、古代・中世であればこうした条坊地割を継承する土地区画、近世であれば幕末期の尾張藩邸との関連も想定する必要がある、いずれにせよ重要な遺構であった可能性が高い。また、層位記録を作成した黄色砂層以下の堆積状況は、弥生時代以前の一帯の地形環境復原に重要なデータといえる。

本部構内 AT27 区では、かつて奈良時代の竪穴住居が見つかった地点に隣接し、また幕末期尾張藩邸の東端の位置とも想定されることから、関連する遺構の確認に十分留意したが、既設校舎地点では破壊が著しくなにも確認できなかった。しかし、周辺や中庭部分には中世以降の良好な包含層が残されており、道路敷部分においては中世前半期の小土坑2基を確認している。今後も一帯で遺構が確認される可能性は高く、慎重に対応する必要がある。